

トルコの欧化による世俗化

山本 新

一 トルコの世俗化の位置づけ

世俗化とは何か トルコの世俗化を考察するにあたって、まず、世俗化とはどういうことをいうのかはつきりしていないといけない。つぎに、世俗化はどの社会にも起るわけではないから、世俗化しない社会がどのくらいあるか、その今日における典型的なものは何かはわかっており、さらに世俗化した社会にはどんなものがあるか、それらは何時、どんな理由で世俗化したのかなどが、大づかみにでも見当がついている必要がある。でないと、トルコの世俗化がどういう位置、どういう意味、どういう将来性をもっているかがわからないであろう。ここで目ざされていることは、トルコの世俗化を単独に考察することではなく、「世俗化の比較研究」の一環としてトルコの世俗化の特殊性を際立たせ、ひいてはトルコと同類のものが何々であり、他の世俗化はどんなものであるかを対比することにある。

世俗化という社会文化的現象を問題にするのは、文明にとって宗教がいかに重要な役割をはたしているかに留意するからである。宗教を重要視するから、文明の脱宗教化現象である世俗化を重要視するわけであって、宗教を重視しなければ、世俗化にも注目しないであろう。一般に世俗化にたいする関心が薄いのは、世俗化された社会に生まれ、育つたため、その風になじんで宗教の役割を軽視または無視しているためである。宗教が文明の誕生と存続に重要な役割をはたすといった。どんな役割をはたすのであろうか。すべての文明社会は有力な宗教をその精神的基軸として誕生し、存続する。たとえば、西洋文明はローマ・カトリックを基軸とし出発し、中世一杯その完全な支配下にあつたばかりでなく、「近世」もほぼキリスト教の支配下にあつたといえる。この際、ゲルマン族のローマ・カトリック教会への改宗が西洋文明の誕生の決定的要因であつた。同じように、ロシア文明はギリシア正教をビザンツ文明より借用することで、その文明の発端をはじめた。

隋唐いごの第二サイクルの中国文明は大乗仏教を国教の如くして再建された。大乗仏教は漢末にインドより伝播した外来の高度宗教である。朝鮮文明、日本文明などは、再建されたこの中国からインド産の大乗仏教を借用することで、未開から文明へと飛躍し、中国文明の周辺文明としてその生をはじめた。

どの文明社会も、このように有力な宗教を精神的基軸として誕生し、その生をはじめめるものである。無宗教ではじまるような文明社会はない。すべての文明社会の出発に宗教が随伴しているというではない。有力な宗教が社会的、文化的諸活動を統合し、主導し、指揮するのでなければ、文明は誕生しえないのである。国家は軍事的権力だけで出来るかもしれない。文明は宗教を統合の理念としてもたなければ成立しない。

すべての文明社会が有力な宗教を精神的基軸としてはじまるとしても、いくつかの文明社会では、その進行の中途または中途をすぎたあたりで、宗教の威光がなんらかの事情、理由でうすれ、宗教がかつての威力と生命力

を失い、後退し、社会の片隅に小さくちぢこまり、形骸化するという現象がおこる。これをここでは世俗化という。より正確にいえば、宗教がそれまでもっていた社会的、文化的リーダーシップを失うことである。その社会の基礎的価値観が宗教的なものから現世的なものに変化し、宗教的な価値観が大手をふってまかり通らなくなる。精神気圧の大変動である。宗教が無くなるのではない。そのようなことはありえない。宗教が主導的でなくなり、重要性を失う。政治や経済や文化の諸活動が宗教的理念の束縛から解放され、宗教から自由となり、それぞれ自律性を帯びてくる。

世俗化を見わける指標はいくつかあるが、その一つに芸術の変化がある。世俗化がおこると、宗教芸術が後退し、それまでの芸術は宗教性を脱ぎ、世俗的理念にもとづく世俗的芸術が主流を占めてくる。芸術はその社会の精神状況をもっとも敏感に映し出す鏡のようなものであるから、優勢であった宗教芸術が後退し、世俗的芸術に主流が交代するところに、世俗化の時期設定をしてほとんど誤ることはないであろう。そう言ったからといって、宗教がまったく姿を消すわけではない。時折その部分的復活がこころみられ、宗教復興の動きがおこることがある。だが、それは部分的、一時的であって大勢を持統的には支配しえない。世俗化したからには、世俗優先の風潮を宗教復興がおびやかすほどには、持続的な効力を發揮しえない。世俗化が時勢となり、時流となり、それが何世紀にもおよぶ。(ただし、その文明の最終期にいたると、今度は世俗化が衰え、宗教への渴望がたかまり、世俗化した時期が終ろうとする。ローマ帝国の末期や漢帝国の末期がそのよい証拠である。)

世俗化しない社会 世俗化はどの社会にも訪れるわけではない。人類史全体からいうと、世俗化しない文明社会の方が多し。四〇いくつの文明社会(大文明が一〇いくつ、周辺文明が約三〇)のうち、世俗化したのは一〇指を僅か越えるにすぎない。西洋人は一般にギリシア世界と西洋世界だけが世俗化したと思っっているが、もちろ

んそうではない。かれらの視界が中東どまりであり、精々ひろげてもインドに辛じて達する程度だからである。中東とインドとにあったすべての文明社会は、たしかに数千年来この方世俗化しなかった。だが、それだけが文明の全部ではない。東アジアの方はどうであろう。ここには少くとも四つの世俗化がみわけられる。日本文明では桃山期に、朝鮮文明では高麗末期に、中国文明では戦国期と宋代とに二回も世俗化がおこった。これら三つの文明では世俗化時代は今日までつづいている。これらの世俗化について、西洋人は一般に気づいていない。ごくわずかの専門家たちが気づきはじめているが、まだ一般化していない。だから、西洋人の世俗化論はほぼ西洋世界に限られており、西洋に訪れた特殊な世俗化を一般化して語る癖から抜け出られない。そして、西洋以外の文明社会はすべて宗教にからめとられているものと思ひ込んでいる。

今日現存していて、世俗化していないと認められる文明社会は、中東一円（イスラム文明）と、インドおよびその周辺文明（ティベツト、ネパール、インド・イスラム、セイロン、ビルマ、タイ、カンボジア、マラヤ・インドネシア）とである。今日地球上で世俗化していない文明社会はこれらにすぎない。他のすべての文明社会は世俗化しているとみられる。

中東とインドおよびその周辺は、近代になっても世俗化していないだけではない。「古代」といわれる、何千年におよぶ期間にも世俗化しなかった。世俗化しないということは、文明の、ひいては宗教の伝統がおそろしく、厚く、重いということであって、軽々しく「遅れているからだ」といってはなるまい。近代になってからならいざ知らず、「古代」や「中世」のことで「遅れている」などいってみても、何を基準にするのか、意味をなさない。中東やインドが五、六千年にわたって世俗化しなかったというのは、一体どういうわけであるのか。

両地域の文明の層の厚みとそこから来る高度宗教の誕生を考えると、両地域に世俗化がおこらぬ事情と理由に

ついで多少うなずけるところがあるう。

人類山脈を图表するとすれば、最高に位するのがメソポタミアで、一きわ高くそだえている。五千数百年級の高峰である。この人類最初の文明の刺激をうけて、数百年のちに南にエジプト、西にクレタ、さらにすこしくれて東にインダス、と五千年級に近い高峰がならぶ。これら三つの内側のメソポタミア周辺にエラム、ずっとくだってヒッタイトなどが中東一円にメソポタミアの周辺文明として目白おしにならび立っている。まさに人類山脈の偉観である。

これらが初代の文明であり、人類の文明史は中東を中心としてはじまり、その放射がインドとクレタにまでようやく達し、これら以外の地域には二〇〇〇年にわたって文明と名のつく社会はなかった。これらの歴史を「古代」に一括しているが、考古学、先史学の未成熟な一九世紀の遺風である。古代という用語を用いたければ、その前半のほぼ二〇〇〇年を第一古代とすべきであろう。これらの第一古代の諸文明はメソポタミア寄りであり、初発のメソポタミアの影響と刺激によって触発され、生じたものである。いわゆる「古代」といわれるものは、これらより一代くだった、いわば第二古代に属するもので、クレタのつぎがギリシア、インダスのつぎがインド、メソポタミアではシュメロ・アッカドという第一サイクルのつぎが、第二サイクルのバビロニアとなる。²⁾ エジプトは三〇〇〇年一本のようである。

「古代」といわれるものだけでも文明の厚みは二層をなしており、インドから中東、地中海域にわたる、かなりの空間が、一層目(第一古代)の文明の領域となる。紀元前二〇〇〇年紀の半ばすぎにこの一層目が終る。新しい民族によって前代の文明が亡ぼされ、その遺産が二層目(第二古代)に継承される。文明の代が変り、前代をうけついで新しい文明が誕生する。インダスはインド(第一サイクル)に、シュメロ・アッカドはバビロニア

に、クレタ・ミュケナイはギリシアに継承される。メソポタミアとエジプトとの狭間に、双方の影響下に新たにシリア（シロ・フェニキア）文明が隣接の二大文明の退潮に乗じて生まれる。

東アジアにはじめて中国文明が誕生するのは、二層目（第二古代）の出現と時を同じくし、中東やインドに比べるならば、二〇〇〇年の開きがある。中国はずっとあとになって生まれた一層目を継承しない、その意味で後発的な、新参の文明である。このことは、人類の中心部がどこにあったか、ひいては中心部の伝統の厚みがどんなに重いかを示すものである。伝統の重さはまず宗教にあり、宗教の重みの大きいところでは、世俗化も容易におこらないだろうと推測される。

右の推測は、いま一つの事象によってより詳しく裏づけられる。それは、「高度宗教」の誕生地が地球上の二カ処、中東、とりわけシリアと、インド北方とに限られているということである。これはトインビーの指摘である。³⁾

「世界宗教」と称されるものは、全部シリアとインド北方とに生まれている。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教はシリアの産である。インド北方（オクソス・ヤクサルテス河盆地）およびその周辺ではヒンドゥー教、大乘仏教、ゾロアスター教が生まれている。これらは世界宗教といわれるだけあって、それぞれの出産地を越え、他の文明へと広く伝っている。二層目のギリシア文明や中国文明は、その末期にシリア出、インド出のこれらの高度宗教に精神的に征服されてしまう。

高度宗教の誕生地 なぜ、「高度宗教」は地球上のこの二カ処にしか生れなかったのであろう。文明の層が二層をなしており、伝統の厚みがあるというだけでは、漠然としており、成程と思わせる答にはならないであろう。トインビーによれば、この二カ処は遠距離交通路の回廊である。そこに、「高度宗教」をうみ出す歴史地理的要因がある。⁴⁾そこで、異質の文明が出会い、たがいに火花をちらした。そこで大帝国と大帝国が覇をきそった。天

下分け目の戦いが軍事的に、文化的に幾度か繰り返えされた。シリアとインド北方は外来の文明の征服にのべつに屈する。一時的な征服ではない。何回もの、長期にわたる被征服の体験を強いられる。そこでは、征服されることによる人々の苦しみが深まり、内面化し、現世を超出せざるをえない。文明の征服とは、軍事||政治的に、社会||経済的に、さらに精神文化的に三重の業苦のローラーをかけられることである。これ以上の苦しみはない。一回ならまだ耐えられよう。二回、三回とかけられてくる。最終のローラーはシリアにおいても、インドにおいても世俗化されたヘレニズムによる。これにたいする抵抗が空しくついでると、魂は内面化し、ついに彼岸へ向けて現世を超越するにいたる。そのようにして、現世的な敗北に、文化的敗北に耐え、苦惱というものにかえがたい意味と価値を発見し、こうして「高度宗教」を生み出すことで、文化混淆の泥沼とみえるものを肥沃な文化合成へと転化する。

このように遠距離交通路の交叉する回廊に生れた「高度宗教」は、文明の闘争を越えたところをもっており、そこにその本質的部分がある。「高度宗教」は、文明の闘争の帰結であり、果実であり、解決であるといえよう。高度宗教は、ある文明、それも外来の浸蝕をうけてくずれつつある文明の産でありながら、生れた土壌を越える超越的次元をもっている。文明を越えたその本質は、人類に普遍的なもの（何人をも感動させる真実）を含んでいるから、他の文明にも受容され、土着化すれば、その土着の文明の着色をうける。三代目（三層目）の文明のすべては、中東とインドに生れた「高度宗教」を文明誕生の決定的要因として出発している。したがって、中東のイスラム文明とインド文明とを除いて、すべての三代目の文明は外来の高度宗教をいただいてはじまる。その宗教的支配の下に入る。三代目の文明の世界史は、中東とインドの英知の結晶である高度宗教に牛耳られ、「中世」一杯すこしてきたといつてよからう。この「高度宗教」の世界的支配は、近代いこの西洋文明の世界的支配に匹敵す

る。しかも支配期間のながさは西洋支配の数倍に達していることをよく考えてみる必要がある。

ギリシアも、「古代」の中国も、自分だけが文化的にとび抜けてすぐれていると自信をもって、自分の周りを「バルバロイ」とさげすみ、「夷狄」と軽んじていたのに、自らの最大、最高の造営物であるローマ帝国や漢帝国の末期に大帝国の屋台がたがたしてくると、自信を失い、これらの外来の宗教に精神的に屈服し、これらに改宗するにいたる。そんな筈ではなかった。思いもそめないことになるものだ。二つとも土着の宗教的伝統が浅く、弱かったからである。

改宗のために武力が用いられたわけではない。この精神的征服は純粹に精神的な魅力によるものであった。ローマ帝国は何百年にもわたってキリスト教徒を「皇帝礼拝」という国是にしたがわぬという廉によって弾圧してきた。しかし、いくら弾圧しても根絶しえないだけでなく、皇帝礼拝という国是が空しいものと観ぜられてきた。そのはてに皇帝みずからそのキリスト教に改宗することになった。大逆転がおこった。このローマ帝国のキリスト教への改宗は、精神の征服というものをもっとも典型的に示す事例である。

大乘仏教の場合も武力でインドが中国を征服したのではない。大乘仏教は、タリム盆地を越え、はるばるシルク・ロードを通して、純粹に宗教的な魅力のせいで中国へ伝播してきた。漢帝国の瓦解後の民族移動期には深く下層にまで浸透し、隋・唐で漢帝国が再建されるときは、大乘仏教は国教の役割をはたしていた。二〇〇〇年以上にわたって並ぶものがない高度文化を維持してきた、誇りたかき中国人にとって、仰天すべきことがおこった。中国人ははじめて外来の文化に屈した。よほど自信を失ったせいであり、また、大乘仏教の宗教的資質がよほど高かったからにちがいない。

外来の宗教による文明は世俗化　外来の宗教を基軸として出発した文明のうち、創造性に富んだ、つまり自立

した文明は世俗化するようである。⁵⁾ 西洋、ロシア、第二サイクルの中国（隋・唐いご）、日本などの諸文明に世俗化現象がみられる。これらの文明はすべて外来の宗教を基軸として出発し、久しくその支配下に立つ。世俗化の直接的な原因と認められるものはさまざまである。キリスト教を基軸とした西洋とロシアでは、正統と異端の闘争が世俗化の直接因と思われる。西洋ではカトリックとプロテスタントの一世紀以上におよぶ宗教戦争がキリスト教の威信を大幅に後退させ、世俗思想の優位をもたらした。一七世紀末のことである。ロシアではニコンの教会改革と旧信徒のこれに対する抵抗、抵抗の徹底的な弾圧のため、ギリシア正教会はにせキリスト（ピョートル大帝）の手にわたり、真の正教会は地下に沈んだと観ずる風がゆきわたり、正教会の威信が大きくぐらついた。やはり一七世紀末のことである。

隋・唐いごの中国では、右よりずっと早く一一、二世紀のころ宋学ルネサンス（儒学再生）において、外来の仏教対土着の儒学の文化闘争がおこなわれ、土着側の、世俗化した思想である儒学が、外来の宗教である大乘仏教に勝利したものとさえよう。この際、儒学が敵の形而上学的深さを自己内に取り入れ、自己をふくらませたことはいうまでもない。⁶⁾ では、日本はどうかというと、武家の軍事的権力と僧侶の宗教的権力の五世紀におよぶ闘争の末、ついに信長、秀吉にいたって軍事的権力が勝ち、合理的、経験的、現世的な思考が勝ちを制し、宗教は權威を失墜し、その牙を抜かれて政治に従属し、政治の手足に用いられる。軍事的権力が社会を動かすその実力によって自信を増すにつれ、社会秩序が人力によって左右できると観念され、神仏の加護をたのまなく、実力が物をいう時代、つまり「おのが力、おのが知恵をたのみとする」（ルター）ようになってくると、軍事的権力の独り立ち、伝統的な宗教的権力に対する軍事的権力の挑戦、そしてその勝利が招来する。これが世俗化の一般的なパターンかと思われる。⁷⁾

要するに、外来の宗教を基軸として出発した右のような文明は世俗化に見舞われている。世俗化の直接因はさ
まざまであるが、結局外来の宗教はその文明の最終までは直接的な威力を発揮することができない。中国でのよ
うに土着の反撃を喰うか、西洋やロシアでのように、伝播先まで正統と異端に分裂し、内ゲバを引きおこして共
倒れの憂目にあうか、いろいろだが、文明の基軸となる宗教が外来だと、外来の根の浅さ、地の弱さが出てく
る。高度宗教は宗教的資質が抜群なのに、異質の土壤でどんなに見事に咲き、ときには原産地よりも多彩で豊
かな開花を見せたとしても、所詮外来は根が浅く、借りものであるから、ながい過程でいずれ土着の反撃を喰
らったり、土着化に当って地方差を生じ、正統と異端に対立し、内ゲバで自滅したりする。簡単にいうと、借り
ものははげてくるのだ。忬部まで染まったようであったが、やはり染色には限度があった。恐ろしいものである。
このように文明が成熟しきると、脱宗教化に見舞われる深因は、宗教が外来だからではなからうか。世俗化の要
因を考察するとき、直接因と深因とをわけて二段構えで考える必要があるであろう。

右の予想が当たっているとすれば、逆に、土着の「高度宗教」を基軸としてはじめてイスラム文明とグプタ期い
ごの第二サイクルのインド文明とが、世俗化しなかったということの逆証明になるであろう。中東とインドが三
代目の数多くの文明をうみ出すだけの宗教性を蓄えているところであれば、宗教的伝統も厚く、また深いものが
あろう。「古代」インドやイスラム文明が知的上昇期に世俗化の傾向を僅かに見せたことがあっても、正統信仰
に圧倒され、持続的な影響をおよぼしえず、世俗化は双葉のうちに枯れてしまった。文明の基軸である宗教が土
着のもので、外来のものでないならば、煮えつまるといふことはあっても、はげることはない。地域差によって
正統と異端に分裂しても、共殺的闘争で共倒れになることはない。土着性をとくに必要とする宗教の場合、原産
地の方が植民地や移植先よりも根が深く、芯が強く、合理化が高じてきても、宗教を容易に無力化することがで

きない。それほど土着の宗教は、外来と比べると強いところがある。外来の高度宗教をもってはじめた文明は、世俗化するが、「高度宗教」の原産地は容易なことでは世俗化しない。「高度宗教」の出産地の宗教的伝統が「厚く重い」というのは、以上のようなことである。

ところが、中東の一角が、有史以来といつてよからう、はじめてくずれたのである。それがオスマン・トルコの世俗化である。宗教的伝統が厚く、濃く、五世紀、一〇世紀におよぶヘレニズムによる世俗化の浸透も、中東の厚い宗教の壁を破ることはできなかった。

むしろ、一〇〇〇年におよぶヘレニズム化に対する中東の反撃が、イスラム教をうみ、イスラム文明に結実し、ヘレニズムに対する反撃に成功し、以後一〇世紀にわたる「イスラム化」の時代をもたらした。その近世における輝ける代表者であったオスマン・トルコが、ついに世俗化に屈したのだから、事は重大である。トルコは自ら内発的に世俗化したのではない。世俗化された西洋文明の強い放射をうけ、洪々、近代西洋の思想や制度をうけることによって、世俗化に感染したのだと形容できよう。欧化（または西洋化）はトルコだけの運命ではない。イスラム圏全体、インドおよびその周辺も西洋化に捲きこまれていく。これらの植民地化されたところとちがって、トルコは独立国であった。だから、自己保存の本能からくるあがきも一倍はげしかったにちがいない。

外発的な世俗化 オスマン・トルコの世俗化は、トルコ社会の内的事情によっておこった内発的な世俗化ではない。⁸⁾ これまでいくつかの社会についてそれぞれの世俗化の直接的原因にふれてきた。それらは、正統と異端の闘争であれ、土着思想の復興であれ、軍事的権力と宗教的権力との闘争であれ、すべて内発的であった。たとえ、文明の基軸をなす「高度宗教」が外来のものであっても、外来の宗教はそれぞれすでに土着化して久しく、「あたかも自生したのかの如く」（内村鑑三）なっていた。土着化するのでなければ、文明の基軸たりえない。その文

明独特の着色を経、内的に独立的に展開していくもの、自己みずからの軌道をもっているものは「外発的」とはいわない。

ところが、オスマン・トルコの世俗化は内発的ではない。自己の内的必然（高まる合理化）によってイスラム教を脱いだのではない。世俗化した近代西洋文明の理念や制度を、はじめは少々部分的に受け入れはじめ、やがて全面的に呑みこまざるをえないような羽目に陥り、ついに「世俗化革命」に踏み切るにいたった。外からの圧力が先行し、のしかかり、その重圧のもとで外来の、ひいては異質の、しかも世俗化された文化を呑みくださなければ、おしつぶされてしまう。生きのびるためには、いやでも外来の世俗化された近代西洋の理念や制度を受けいれざるをえなくなった。オスマン・トルコの世俗化の直接因は「欧化」である。もっぱら外からの欧化による世俗化である。このような世俗化は外発的といわざるをえない。これは先に瞥見した内発的な世俗化と區別して扱わなければならない。内発的な世俗化においては、世俗化の直接因が内的であり、世俗化は内的展開であった。これに反して、外発的な世俗化にあつては、世俗化の直接因が外的であり、世俗化は外から土着に割りこんでくる。外発的な場合はみずから世俗化しうるほどの「合理化」の傾斜をうちに宿していなかった。強烈な、世俗化した文化の注入を外から受けて外発的に変質させられたわけである。

外発的な世俗化 こうした、こまごましたような區別立てをわざわざするのは、つぎの三つの事柄を念頭においており、それをあらかじめ明らかにしておきたいからである。

(1) 近代西洋の桁ちがいの優位に直面してこれにすばやく対応し、「欧化」に踏みきれた社会（ロシヤ文明や日本文明）が欧化する以前にすでに世俗化していたのに反して、オスマン・トルコ帝国やイランのサファール朝やインドのムールガル帝国はまだ世俗化していない社会に属していたため、容易に「欧化」に踏み切れなかった。

すでに世俗化している社会は、世俗化した異質の文化をうけ入れやすい。世俗化していない社会は、異質の、世俗化した文化をうけ入れにくい。ロシア文明や日本文明が近代西洋文明をすばやくうけ入れたのは、すでに二つとも世俗化していたからである。

これに反して、イスラム圏やインド及びその周辺は、近代西洋と出会ったとき、世俗化していなかったから、世俗化した文化へ適応することが極度に困難であった。宗教文化同士は異質であっても、宗教的な価値観で有無あい通ずるところがある。世俗文化同士は異質であっても、世俗的な価値観の点であい通ずるところがある。宗教文化と世俗化した文化とは、たがいに異質であれば、価値観がちがうから、もとも通ずるところがすくない。したがって、外来の世俗化した文化が世俗化していない社会に浸透した場合は、外来と土着の違和のうえに、宗教的価値観と世俗的価値観の違和が重なるから、世俗化していない土着の宗教にとって、また土着の伝統にとって、この浸透はもともと破壊的な作用をおよぼす。オスマン・トルコの世俗化はその激しい土着破壊の結果と見られる。

日本文明やロシア文明が近代西洋文明にすばやく適応できたのは、二つが「世俗化」されていたからだといったが、それだけならば、中国文明の欧化も同じくすばやそうなものだが、トルコと同じく欧化にもたっていた。それは何故かという疑問がおこるのである。その理由は中国が土着の文化に自信をもちすぎたためと思われる。自らを中華と称し、他を夷狄として蔑視する自惚れが強いところでは、たとえ世俗化していても、他の文明を容易に受け入れようとするいからである。だから、日本文明とロシア文明の変り身の早さは、二つが世俗化しており、そのうえ、自らの文化にあまり自信をもたない周辺文明だからだといふべきであろう。世俗化しさえすれば、外来の文化をうけ入れやすいというものではない。外来をうけいれるのは、いつもよくよくのことである。

こちらが世俗化しておれば、障害がよりすくないということである。世俗化もせず、自分の文化に自信をもっておるトルコが、いかに欧化にあたっては右のことから理解できるであろう。中国よりも障害が一重多かった。日本やロシアよりも障害が二重も多かった。

(2) 内発的な世俗化にあつては、世俗化とは、宗教的衣裳、宗教的着色でもって考えられている観念からその宗教色を抜きとって、その観念を理性で思考しうる合理的なものに脱色し、変色することであるから、宗教的資産が全く捨て去られるわけではない。この際の世俗化とは、すでに宗教が宿していた普遍的なもの、超経験的な宗教語で語られていたものを経験的な世俗語にいし直し、解し直すわけである。世俗語にいい直し、世俗的価値で解し直せるほどの普遍性を宗教が宿していないなら、宗教を世俗化することもできない。世俗化で信仰に理性がとってかわるといっても、理性が信仰とはまるで違うことをあみ出すわけではない。そんな創造力は理性にはない。信仰で超経験的、超合理的にとらえられているものを理性で合理的に、経験的にわかるものにするのだから、世俗化された観念は、もとの宗教的観念の風変わりな子供（ヴァリエーション）のようなもので、双方には何んらかの連り、継承と展開がある。完全に過去の遺産と切れた、まったく新しい別物ではない。世俗的考えの内実は宗教的含蓄のなかにあつた。世俗化とは、特定の宗教に宿っている観念を世俗流に継承し、変容すること、簡単にいえば、その世俗版を作成することである。もとの宗教と新しい世俗化されたものとのあいだには、あきらかにある連続性があり、世俗化への展開が迎れる。迎れなければ、内発的な世俗化ではない。

たとえば、近代西洋の鋭くした「平等」の観念、ひいては「基本的人権」の観念は、理性と良心に照して、キリスト教の神なくしてもわかるけれども、そもそも人間が神の前では平等であり、ひとしく神の被造物であり、にもかかわらずひとしく罪人であり、ひとしく救いに値するという宗教的観念から派生したものにほかなら

い。また、神の「摂理」といった宗教的観念は、歴史から超越的な神の手を抜いてしまうと、「歴史的必然」といった考えに変色される。あるいは、自然から超越的な神の手を色抜きすると、「自然法則」の概念がえられる。このように世俗化された観念は宗教的観念に由来しており、その素性をたしかめることができる。

ところが、オスマン・トルコのような外発的な世俗化にあつては、キリスト教を世俗化して作った近代的観念が外から土着に流入してくるから、土着のイスラム教の観念とはすこしも噛みあわず、なんのつながりもなく、したがって、イスラム教そのものを世俗化するように作用せず、外から無理やりに割り込み、裂目を大きくし、外来が接木的に土着に居ずわることになる。木に竹をつぐとはこういうことである。この外来のものは、インスピレーションを外に仰ぐだけでなく、育つための栄養も外から来るのみで、土着とふっ切れており、この外来のものがより重要に基本的になればなるほど、土着の文脈を乱し、破壊し、外来と土着との虚しい接合の努力がつけられる。これが接合されないと、土着の文明はばらばらに解体され、はては、外来に乗つとられてしまい、消滅せざるをえない。オスマン・トルコはイスラム圏のなかでただ一つこのような解体、さらに高ずれば消滅へ向けて確実な一歩を踏み出した。それがただ一国であれば、イスラム圏からのトルコの脱落であるが、おそらくこれにつづくものが続々と出て来るようなら、そうなれば、先駆者だということになる。とすれば、イスラム圏の一角がくずれだしたことは、将来にむけても由々しいことなのである。

(3) 外発的な世俗化の事例はオスマン・トルコだけではない。いくつかの事例があるように思われる。まず、古きローマ、紀元前二世紀頃以前のローマについて、ヘレニズムという世俗化した文化の急激な大巾の流入が土着の文脈を乱し、伝統的信仰を切りくずし、ずたずたに引き裂き、古きローマ社会をわずか一世紀ほどのうちに世俗化してしまった。この結末は古きローマがヘレニズム勢力に軍事的に破れたためではない。ローマは第二ポ

エニ戦争でフェニキアの殿将ともいふべきカルタゴに勝ち、さらにヘレニズムの最強の代表であるマケドニアをもうち倒した末に、軍事的に勝利しながら文化的にはヘレニズムの圧倒的洗礼をうけ、完全にこれに敗北した。このローマの事例は、世俗化していない社会が外来の世俗化された優勢な文化の急激な流入をうけ、無制限に無反省に世俗化された文化に全身をさらしている、どんな事態になるものかを典型的に示していると思われる。軍事的な勝利者が文化的に敗北し、ヘレニズムに喰われて世俗化するとともに、自己をも喪失してしまった。この着想はじつはオルテガの『世界史の一解釈⁹⁾』によるものであって、筆者の奇矯な発想ではない。

他の事例 外発的な世俗化の事例はまだほかにありそうである。ビザンツ文明の世俗化という聞きなれない事例も外発的なものではなからうか。一般にビザンツ文明の寿命は、一五世紀の半ばオスマン・トルコによって主都コンスタンチノープルが陥落したとき終ったと考えられている。しかし、軍事的敗北や帝国の瓦解が必ずしもその文明の消滅を意味しないから、トルコ治下にあっても、ビザンツ文明はまだ存続していたと考えられる。これが世俗化するの、つぎのような事情によるのではなからうか。トルコに対する西洋の優位を、トルコ軍による第二次ウィーン包囲の敗北から察知し、ギリシア正教徒のギリシア人やセルビア人がそれまでの反感を捨て、近代西洋に歩みより、近代西洋の世俗化された思想や技術を身につけているうちに、西洋のナシヨナリズムに染まり、「ファナール人の大構想」という多民族国家の理念が小さなギリシア・ナシヨナリズムに変質し、わい少化され、自らギリシア独立を達成することによって世俗化するとともに、自らの文明をも喪失し、西洋文明に「同化」されるにいたったと思われる。これについてはいますこし詳しく後述する。

右の二つの事例ほど破壊的ではないが、外発的な世俗化の範疇に入れてよいだろうと思われるものに朝鮮文明の世俗化が挙げられる。ヘレニズムの急激な流入が古きローマの伝統的信仰をこなごなに砕いたほどどくはな

かったにしても、一三世紀にいたって中国の元朝の新風が、突如朝鮮に流入してきた。この新風が、源泉をたたれて土俗化し、くずれ、生命を失いつつあった朝鮮の仏教に致命的な打撃を加えることになった。なぜ、世俗化された中国の新風が突如朝鮮に入ってきたかという点、元の前の宋代には、中国の北部は遠、ついで金に三世紀にわたって征服され、高麗朝はこれらの新興の牧民の王国を宗主国と迎ぎ、中国との陸路をたたれ、したがって宋代におこった中国の世俗化(宋学ルネサンス)についてよく分らなかったからである。源泉をたたれた朝鮮の仏教は急速に土俗化し、道教化し、呪術化し、形骸化しつつあった。¹⁰⁾大乘仏教は九世紀に産地インドで凋落するや、仲継所のタリム盆地でも凋落がはじまり、ついに中国においてさえ儒学に陵駕されるという悲運に見舞われた。源泉をたたれたため類似の凋落が朝鮮にもおこりつつあるところへ、中国の新風がどっと入り込んできた。中国の流儀をよしとする朝鮮の「事大主義」¹¹⁾の典型的事例がここでおこった。それは、世俗化の「事大主義」というべきものである。中国で仏教が尊ばれているときには、朝鮮でも仏教が尊ばれ、中国で儒教が尊ばれるようになる、すぐその流儀を真似するということになる。中国の世俗化には内的必然があった。つまり内発的であった。外來の大乗仏教を土着の儒学によって乗りこえようという二、三世紀におよぶ外來対土着の思想的苦闘のはてに達成されたものである。だが、朝鮮には世俗化のこのような積極的な内的必然はなかった。なぜなら、儒学も大乘仏教も、ともに朝鮮にとっては外來の思想であり、仏教から儒学への轉換は外來思想の事大主義的な突如のすげかえにすぎないからである。土着による外來との格闘や土着の展開は中国のようににはみられない。とすれば、このような世俗化を外発的といっても過言ではあるまい。

- (1) ソヴィエトの日本学、シナ学の權威ニコライ・コンドラがその著『東洋と西洋』(丸山政男ほか訳、上、下、一九六九、

理論社)のなかで、宋学ルネサンスについて書いたところに宋代の世俗化に触れている。中国、朝鮮、日本の世俗化に注目しているのは Edwin Reischauer: *East Asia: The Great Tradition*, 1962, p. 220 ff., p. 227, pp. 420~40である。

- (2) ラシュトン・コルボーン『文明社会の起源』(木村隆一訳、一九七三、経済往来社)一四ページ。
- (3) トインビー完訳『歴史の研究』第16巻(下島連ほか訳、一九七一、経済往来社)一六一~一七二ページ。
- (4) 右同一六三~一六四ページ。
- (5) 山本新『トインビーと文明論の争点』(一九六九、勁草書房)二五二~二五四ページ。
- (6) A. F. Wright: *Buddhism in Chinese History*, 1958, pp. 89-92.
- (7) 山本新『トインビーと文明論の争点』三〇五~三二七ページ。
- (8) 「外発的」「内発的」というのは夏目漱石が和歌山講演「現代日本の開化」において、明治以後の日本の近代化(開化)は外発的であり、ヨーロッパの近代化は内発的だといった用法によるものである。この用法を筆者は世俗化へ転用した。
- (9) オルテガ『世界史の一解釈』(オルテガ著作集7、小林一宏訳、一九七〇、白水社)二三七~二五四ページ。
- (10) Edwin Reischauer: *East Asia: The Great Tradition*, 1962, pp. 420-1. 池明観『韓国文化史』(一九七九、高麗書林)二二八、一三二、一八六ページ。
- (11) 梶村直樹『朝鮮史』(一九七七、講談社)によれば、申采浩は妙清の一一三五年におこしたクーデターの失敗から事大主義の優位がきたとみている。(四六六ページ)

二 トルコの欧化の位置づけ

欧化とは何か オスマン・トルコの世俗化は欧化(近代西洋文明の受容)によるもので、外発的である、つまり内的展開によるのではなく、外力による土着への接木、またはねじまげであることを考察した。では、世俗化の直接因である欧化とはそもそもなんであろう。なぜ、欧化がおこるのか。また、どんな順序で欧化は進行してきたのか。トルコの欧化はそこに位置づけられるのか。欧化はグローバルな現象だから、トルコの欧化を他の

社会の欧化と対比し、それぞれの過程なり、性格なり、帰結なりを一応隈どって欧化におけるトルコの位置づけをしておく必要がある。

欧化または西洋化とは、西洋文明が他の文明に浸透していくこと、他の文明の側からいえば、西洋文明を受け入れること、西洋文明に影響されることである。欧化は一五世紀末新大陸からはじまり、一七、八世紀でヨーロッパ周辺におよび、一九世紀一杯で全地表を覆うまでになった。一九世紀になれば、優勢な西洋文明が世界のすべての文明を圧倒し、制圧するにいたった。こうなつては欧化をまぬがれうる社会は一つもありえない。西洋に対して鎖国をしていた四つの社会（エティオピア、日本、すこしおくれて中国、さらにおくれて朝鮮）も一九世紀の半ばごろには開国をせまられ、欧化せざるをえなくなった。

多くの地域は西洋列強の餌食となつて、征服され、植民地におとされ、植民地支配という強制的な欧化にさらされた。土着の王朝がすっかりしていて征服をまぬがれた僅かな社会（独立国）も、植民地化されないために、近代西洋の武器や軍制や教育を導入することからはじまり、やがて制度や技術や法や知識をとり入れるようになり、ついには近代西洋の理念に改宗するにいたった。第二次大戦までの数世紀に世界でおこつたもつとも重要なことは、西洋文明の圧倒的な優位と、西洋以外のすべての文明が、植民地化されようと、辛じて植民地化をまぬがれようと、等しく西洋化され、西洋に蚕食されてきたということである。西洋化（欧化）からのがれようとすゝるすべての試みはむなしあがきにすぎなかつた。

欧化の第一波と第二波 世界的規模の欧化の流れのなかにオスマン・トルコの欧化を位置づけるためには、近世初頭からの欧化がどういう順序で進行したかを概観する必要がある。一五世紀末のはじまりから一九世紀の頂点に達するまで、ほぼ四世紀が経過している。欧化は一瞬に達成されたのでも、一挙に成つたものでもない。

この数世紀の過程を大きく二分し、前半は欧化の第一波であり、後半をその第二波として、二つのちがいを対照的に扱う必要がある¹⁾。欧化（いいかえれば、ヨーロッパの世界拡大）は途中で担い手がかわる。とともにその性格（または世界征服の動機）が一変し、一変するや、ますます強力となり、ついには、支配網を地球大に拡げ、この網の目からのがれうる社会は地球上に無くなるにいたる。

第一波の担い手はポルトガル、スペインである。これらが近代後期に華々しい活躍をしなかったので、見逃されやすい。近代後期に力点をおくのは、近くしか見えないという意味で歴史的近視眼である。欧化の第一波を注視しないと、ことの発端がぼやけ、ずっと昔からヨーロッパの優越があったかの如き錯覚を助長することになる。

なぜ、イベリア半島のポルトガル、スペインが先鞭をうけたまわることになったのか。そのわけは、中世の生れつつあったヨーロッパ社会が八世紀からイスラム勢力に押しまくられ、痛められ、イベリア半島を何世紀にもわたって征服されていたところからはじまる。イスラム勢力はここにイベリア・イスラムといわれる高度の文化をイスラム文明の一翼として築いた。一一世紀になり、自力を蓄え、自己の様式に「目覚めた」²⁾フランク人（ヨーロッパ人）は十字軍を起して、イスラム文明との長期の闘争に入る。十字軍は結局失敗するが、この長期の闘争によってビザンツ文明とイスラム文明から以前にもまして多くのものをヨーロッパは学び、吸収し、大文明としての骨格をそなえてくる。聖地エルサレムを奪取し、インドへの交通路を確保することには失敗したが、失地イベリア半島を一四、五世紀にいたってようやく回復することができた。より高度のイスラム文明と数世紀の闘争をし、より高いイスラム文化の達成を吸収しながら、イスラム勢をジブラルタル海峡の向うに追い落した。この間、ヨーロッパの全神経はイベリア半島に集中し、ヨーロッパの集中したエネルギーがここで発揮された。このポルトガルとスペインに集中したエネルギーは、勢いのあまり、ついに大西洋へと乗りだすことになった。そこ

から「大航海時代」がひらかれる。これが欧化の第一波であり、ポルトガルとスペインが第一波の主要な担い手となる理由がここにある。

第一波の特徴について、その担い手がポルトガル、スペインだということのほか、なお二つの点を注目したい。

一つは、一六、七世紀の段階でヨーロッパは全世界を支配したのではないことである。そんな力はまだなかった。この時期のことを「大航海時代」というが、うまい表現である。狭い地中海から大西洋、インド洋、さらに太平洋にと遠洋航海に踏み出した。第一波は大洋を支配したとはいえる。しかし、人類史の中枢部である中東やインドの陸地を支配したわけではない。ここはイスラムの堅壁であって、西にオスマン・トルコ、東にムガル帝国、中にサファールビー朝がでんと座っていた。これらには一指も触れることができなかった。むしろ、オスマン・トルコのごときはヨーロッパに対して攻勢に出ている。ヨーロッパは十字軍の失敗にこりて、イスラム圏に直接攻撃をしかける愚を悟り、いわば遠まきに、海洋支配によってイスラム包囲をくわだてたわけである。³⁾イスラムの海であったインド洋は一六世紀にはヨーロッパの手におちた。いくつかの港に布教と通商の拠点を作った。だが、日本やエテイオピアなどは鎖国をもって第一波を撃退することができた。

第一波のもう一つの特徴は、一六、七世紀の段階ではヨーロッパはまだ世俗化していなかったという点である。世俗化していないときは、宗教的価値観が世俗的な価値観よりも優先し、主導権をにぎる。新大陸を征服したが、征服の大義名分は異教徒をキリスト教に改宗させることであった。ときには現世的利益を損じても宣教の方を優先させることになる。教会と国家が手を結んで宗教優先の考えを進めるので、世俗的なプランターの思い通りにならない。中南米においては、近代後期にいたっても、第二波の支配圏とはちがって資本主義が未成熟にとど

まったのは、世俗化が十分でなく、近世初頭の宗教優先の風がいつまでも尾を引いていたからである。⁴⁾

この世俗化の遅れから「遅れの有利さ」とでもいうべきことがおこることに注目しておきたい。第一波が支配した中南米においては、その後、人種差別がほぼ消滅し、人種問題が解消しているといえよう。なぜであろう。宗教が優勢であるときは、「宗教的差別」が優勢である。「宗教的差別」は、「人種差別」とちがって、差別解消の方途をもっている。異教徒であるかぎり、差別処遇をうけるが、異教徒が改宗してキリスト教徒になれば、対等の人間として処遇される。宗教的差別においては、改宗が最大目標である。改宗しさえすれば、宗教的差別が解消される。改宗を優先するかぎり、黒人にもインディオにも、救われるべき魂が宿っており、かれらは改宗しうる精神的能力をもっていることが前提されている。魂が精神的能力を発揮して改宗するならば、対等の人間になりうる。人種差別においてはこうはなっていない。改宗しようが、同化しようが、終身的にしかも世襲的に、いいかえれば、生まれながらに、生得的に劣等人種の烙印がおされている。⁵⁾

欧化の第二波はオランダ、イギリスを先頭とするものであり、一七世紀のうちに第一波を陵駕してしまう。

一七世紀後半からは世俗化されたものとなっている。第二波においては、現世的な関心が主導的であり、宗教的関心は従属的であった。この変化（世俗化）は、ヨーロッパの内的事情による。一六世紀から一七世紀へおよびカトリックとプロテスタントの一世紀以上の宗教戦争の結果、宗教の威信が大巾に後退し、信仰にかわって理性が社会的、文化的諸活動の指導権をとるにいたる。ここに近代前期と近代後期とをわかっ境界があり、真の近代は後期からはじまるといってもよい。バターフィールドが科学革命と称し、トインビーが一七世紀精神革命というものである。ヨーロッパの世俗化という精神気圧、価値観の大変動である。この世俗化の風をいち早く担い、宗教から自立した経済活動を活発にすすめていったのが、第二波のプロテスタント諸国で、オランダ、イギリスで

ある。カトリックにしがみつくカトリック国、とりわけ第一波の担い手は、この近代化の新しい風潮にのれず、うしろ向きで不活発となっていく。

第一波と第二波の違いは一七世紀にはいるころからポルトガルとスペインの勢いが凋落し、これらにかわって、オランダ、イギリス、ついでフランスが主導的となるので明らかである。この第一波と第二波の違いについて、日本の鎖国のなかにも、その証拠をかすかながらみることができるといえる。日本は秀吉から一七世紀にはいるころより鎖国を考え、完全に鎖国体制に踏み切るのは家光の代、三〇年代からであるが、面白いことには、鎖国体制に入ってから、出島という小さな窓を開け、オランダとの通商をゆるし、蘭学への道を空けておいたことである。プロテスタントのオランダは、カトリックのポルトガルやスペインのようにには宣教衝動にかられていないということが、当時の日本の支配層にもわかっていた。キリスト教の宣教を禁止し、西洋流の生活様式が日本に流入しないような制限、かすかすの屈辱的な処遇にもかかわらず、オランダはしのび難きをしのんで僅かばかりの通商の利の方をとって、これに応じた。宣教よりも通商の方を優先させているのでなければ、徳川幕府の出島制限管理にはとても応じられなかったであろう。ここにすでに欧化の第一波と第二波の違いを読むことができる。

第二波は二段掛け 欧化の第一波は海洋支配はしたが、旧大陸の諸文明のひしめいている、人口稠密な中東からインド、中国などの陸地をまだ支配したわけではない。海と港とを確保したが、それでも日本やエチオピアからはじき出されたことなどをみてきた。ヨーロッパの優位がほぼ明らかになるのが、一七世紀末からであるが、優位したからといって、世界支配がすぐできたわけではない。というのは、ヨーロッパのすぐ東の隣りにロシアとオスマン・トルコがあり、近世初頭より手ごわい存在で、ヨーロッパに屈していなかったからである。

新大陸を除けば、欧化は植民地化のかたちではじまったのではない。第一波は旧大陸において、永続的な深ま

る欧化ではなく、ある序曲、先駆的な前触れにすぎなかった。鎖国ではじき出すことができるほどの弱い支配であった。欧化の本番は世俗化された第二波の方にある。

第二波は二段掛けになっており、一七世紀末から一八世紀末までが一段目であり、二段目が一九世紀からはじまる。一段目はロシアとオスマン・トルコ治下のギリシア正教徒（ギリシア人およびセルビア人）とが一七世紀末から欧化しはじめ、一世紀おくらせてオスマン・トルコの欧化がはじまる。二段目は一九世紀からで、インド、中国、日本の順序になる。

東アジアの欧化は二段目の最終に属するので、われわれ日本人には、第二波の一段目の欧化が目に入らない嫌がある。地球は広いから、欧化の第二波はヨーロッパに近いところからはじまり、東漸してくるわけである。一挙に旧大陸全体におよんだのではない。

第二波の一段目が旧大陸の東端にいるものにしっかり見えないのは、遠いところに起ったためだけではない。人間の視力からいって、遠いところはかすむのが当たり前だが、遠いだけでなく、欧化の一段目が鎖国の安泰期におこっていたから、こちらにはまるで実感がなく、東アジアと類似のことがおこっているのに、古い昔のとお国のお話としてしか映らない。そのうえ、三つの事例の二つまでがヨーロッパ内のことだと思いきまれ、欧化の事例としては注意をひかなかつた。ヨーロッパ内のことは欧化にはならない。欧化とは、非ヨーロッパがヨーロッパの文化を受けいれることでなければならぬからである。

一般に東欧といわれる地域における文明の分布について、きっちりした区分、つまり境界設定ができないのは、国家単位で、せいぜい民族単位でしか歴史を考えていないからである。一九世紀らしい文明単位の思考がナショナリズムのせいで曇ってしまった。ビザンツ文明とヨーロッパまたは西洋文明とはちがうものだし、ビザンツ文

明を享けて一〇世紀末ようやく文明になったロシア文明も、これらとは別の文明である。これらをヨーロッパという地理的名称で一括してしまう癖から抜け出ないと、ロシアの欧化やギリシア正教徒の欧化が見えてこない。

しかし、トルコの欧化は注意すれば見えるはずであり、それが良く見えてくれば、トルコ治下のギリシア正教徒の欧化が、トルコの欧化の前触れであり、先駆であったことがわかるであろう。ビザンツ帝国が一五世紀の半ば最終的についでしまつたら、ビザンツ文明も消滅したのだと思うのは、あまりにも政治優先、国家偏向の考えである。帝国の瓦解とともにビザンツ文明が消滅したのなら、その欧化などありはしない。そうではない。オスマン・トルコ治下でも、数世紀のあいだビザンツ文明は生きつづけていた。だから、ギリシア正教徒の欧化がありうるのだ。

欧化の第二波の一段目にはつぎの三つの事例がある。

(1) ピョートル大帝からはじまるロシアの全面的な欧化

(2) オスマン・トルコ治下のギリシア正教徒のギリシア人、セルビア人によるほぼ同時期の欧化

(3) 右より一世紀ほどおくれてようやくはじまるオスマン・トルコのセリム三世からの渋々の制限つき欧化

ロシアとトルコの欧化は、植民地化による欧化ではなく、独立国の欧化だという点で、日本の欧化と同類のものである。彼我のあいだに二、三世紀の開きがあるため、欧化の動機や過程や結果に類似性が多々あるにもかかわらず、それがみえてこない。われわれ日本人の視野が東アジアどまりで、半植民地化された中国やせいぜい植民地化したインドと対比して、日本近代化の成功を語ろうとする風が強い。そして、ロシアやギリシア正教徒やトルコの欧化、つまり第二波の一段目の欧化を無視して、アジアのなかでただ一国、日本だけが近代化（つまり欧化）に成功したなどという。これは中国やインドとだけ比べた話である。自分の囲りだけしかみず、近々百

年ぐらいいしか見ない歴史的、地理的近視眼をそろそろ超える必要がある。ヨーロッパの優位は一七世紀末に確立されており、旧大陸全体におよぶのにどれだけ時間がかかり、どういう順序で一九世紀の半ばごろ東アジアに達したかを総体としてつかむことができれば、部分的な、つまり近視眼的な短期的考察しかできず、おこっていることの全貌、全過程がとらえられない。こんなことでは、未来に向けて備えることもできないであろう。ロシアの本格的な欧化は一七世紀末ピョートル大帝のときからはじまる。

ロシアは鎖国していたわけではなく、国境も多少移動するから、自然発生的に個別的な、部分的な欧化現象はみられた。だが、本格的な欧化路線を国策としてとりはじめたのは、ピョートル大帝からだといえよう。

なぜ、ギリシア正教会を死守する最後の砦であり、「第三のローマ」をもって任ずるロシアが、ヨーロッパの文化に膝を屈するにいたったのか。それは、一六、七世紀の段階でロシアはしばしばヨーロッパ側のポーランド、スウェーデンに攻めこまれ、軍事的に手痛い敗北を喫しており、このままでは「第三のローマ」どころか、独立を保つことすら覚束ないと危惧されていた。とりわけ、一七世紀後半からヨーロッパの軍事技術の優勢となっていることが、オスマン・トルコによる第二次ウィーン包囲の徹底的な敗北とトルコの落ち目で明らかとなった。ピョートル大帝は未来の波がどこにあるかを鋭く見抜いた。かれは意を決して全面的欧化に突入する。

「全面的欧化」とは制限つきでないということである。つまり、軍事技術の面ばかりでなく、教育も政治も、全文化にわたって品目を選ばず無制限に近代西洋の世俗化した文化を導入しようとした。その徹底ぶりはトルコにおけるセリム三世の「ニザムウ・ジェディート(新しい統治)」や中国の「洋務運動」やわが我魂洋才などのような、おぼろげとした制限ぶきの欧化に比すると驚くべきである。それは大胆な脱皮であり、変身であることがわかる。もっとも、近代西洋の文化をうけいれるものは貴族にすぎなかった点に留意しないと、政教分離の運動

とか農奴解放の運動など、社会構造にかかわる問題意識が一九世紀にならなければ自覚されなかつたわけが理解できないであろう。

一九世紀のはじめまで欧化は貴族に限られていたとはいへ、小手先でなく、軍制の全般に徹底していたため、軍事面では速効をあらわし、一八世紀の後半にはオスマン・トルコ、スウェーデンを破り、一九世紀の一〇年代には天下無敵のナポレオン軍を迎えうって、これを敗走させるにいたった。連戦連勝の破竹の勢いであつた。そこからロシアはヨーロッパ列強の仲間入りをしたかたちになり、ロシアがヨーロッパだという観念の現実地盤を作つた。このように当初の欧化が成功すると、たとえ国内政治的に反動が優勢になつても、欧化の初速がついて対外的には欧化が下火になることはない。欧化路線が確立され、攘夷論や鎖国論のような気配がおこつたところで、それが勝ちを占めることはない。これは日本やロシアについていえることだが、トルコのように当初の欧化が失敗すると、伝統的保守派が勢いづいて、欧化を遮断しようとする反動が勝ちを占めることになる。日本の欧化過程でおこつたさまざまな反応は、それに呼応するものがロシアのなかには一杯ある。ロシアをヨーロッパに押しこめると、こうした呼応がさぐれなくなる。

ギリシア正教徒の欧化 ロシアの欧化は歴史の表層を見ているだけでわかる。だが、オスマン・トルコ治下のギリシア正教徒の欧化は一般には気づかれていない。歴史の裏面のことだからである。ロシアの欧化のように植民地にされるかもしれないという危機感からられ、政府が欧化政策をとるときは、欧化は目立ってみえる。だが、ギリシア正教徒の欧化は、われわれ日本人の熟知している鎖国から開国へのような、政府が行う一八〇度の方向転換ではない。オスマン・トルコの政府とは別に、その意に反して内密に行われたものである。第二次ウィーン包囲におけるトルコの敗北を見て、トルコが落目になれば、自分たちはイスラム教徒の政府の下に久しく屈辱を

耐えてきたが、将来、独立できるだろうという希望が湧いてきた。西洋列強がトルコをたたいてくれるだろう。トルコはますます弱体化するだろう。それなら、より将来性のありそうな西洋の方に近づき、近代西洋の知識や技術を身につけてオスマン・トルコを出し抜いてやろうと目論むにいたる。

ビザンツ文明のギリシア正教徒は一二世紀の教会分裂いらいカトリックと決定的にたもとをわがち、十字軍の侵攻によってうらみを深くし、ビザンツ帝国の主都コンスタンティノープルがオスマン・トルコによって陥落したとき、カトリック側につくよりも、イスラムのオスマン・トルコについて信教の自由を保証される方がましだと観じたくらいで、西洋にたいするその恐怖、敵意は根の深いものであった。それなのに、一七世紀には西洋にたいする根深い敵意と嫌悪を急に一擲し、近代西洋に歩みよってくるのは、何故であろう。第二次ウィーン包囲からトルコが落日になるだろうし、西洋が隆々としてくるだろうという国際情勢の変化がその原因の一つだといふことには触れた。しかし、それだけでは、何世紀にわたって積り積った宗教的敵意を乗りこえさせるに足る十分な理由にはならないであろう。もっと宗教的、内的な理由がなくてはならない。

ギリシア正教徒の西洋に対する態度が一七世紀にがらりと一変するのは、西洋自体に大きな精神気圧の変化が訪れたからである。すでにすこしは言及したヨーロッパの「世俗化」が、一世紀以上におよぶ宗教戦争の勝敗の決着のつかない、いまわしい殺しあいの結果おこった。ひとびとは宗教的狂信に食傷し、その虚しさにいや気がさし、そのため、宗教の威信が大巾に後退し、宗教が社会的、文化的な諸活動のリーダーシップを失うとともに、宗教的な寛容が生まれ、ひろまり、宗教的信念のごり押しをやめるにいたった。元ビザンツの、今オスマン・トルコ治下のギリシア正教徒に対しても宗教上のこととやかかくうるさくいわなくなってきた。たとえば、ヨーロッパのいくつかの大学がギリシア正教徒に門を開らいた。こうなると、正教徒は世俗化した近代西洋なら、その気

さえあれば、近づきやすくなった。宗教が強いときは、宗教上の反目が大きな障害であった。この障害が西洋側でとれたので、ギリシア正教徒はずっと案に世俗的な知識や技術や政治理念にいたる通路が付き、道がひらかれた。世俗化したヨーロッパへの接近は、かれら自身が世俗化される原因ともなる。接近の障害がたんにヨーロッパ側でとれただけでなく、正教徒側でも障害がとれて行きつつあることを示すものである。

近代西洋の世俗化以前に、正教徒のなかに西洋に宗教的接近をこころみたものがある。クレタ島の総主教キリロス・ルカリス（一五七二—一六三八）のカルヴェイン主義への接近が挫折したのは、ローマ・カトリック（つまりはハプスブルグ家）に対抗するために、プロテスタントと結ぼうとするかれの戦略が、正教徒には許しがたい考えであったからである。総主教という最高の位にありながら、教会の方向をも、信徒の多数者をも動かすことができず、オスマン・トルコの政府からもにらまれ、何回か総主教をやめさせられたり、復活させられたりの有為転変ののち、ついに、イエズス会士の教唆に動かされたムラト四世によって一六三八年に処刑されるにいたる。西洋がまだ世俗化されていない時期に、宗教的に西洋に接近しようとするところがどんなに無理かという良い実例である。同時期に日本やエテオピアから宗教がかつた西洋が同じ理由ではじき出されている。西洋が世俗化すると、宗教の優勢な前よりはずっと容易に受容されるにいたる。

ファナール人の大構想　ギリシア正教徒の欧化のなかでもっとも際立っているのがファナール人の欧化である。ファナールとは首都コンスタンティノープルのギリシア正教徒がトルコ政府につよく要求して住居権を獲得した特別地区のことで、民族名ではない。民族はギリシア人だが、ファナール特別地区の住民をファナール人という。経済的に地中海貿易にかかわり、仲々の勉強家で、教育程度が高く、正教徒のくせに、イスラムの文献にも精通しており、したがって、国際情勢がよく見え、知的にも新しいものを理解する能力を備えていた。ギリシ

ア正教徒のなかの中核的、頭腦的分子であった。

一六六八―七四年の第二次ウィーン包囲におけるトルコの敗北を目のあたりに見て、一四世紀いらい、とりわけ一六世紀いらいヨーロッパを押ししていたトルコの勢いが、一七世紀より絶頂を越え、この敗北を境として今後凋落の一途をたどるだろうと心ある正教徒であるファナール人に見えてきた。このことはトルコ人にも、また西洋人にもすぐはわからなかった。何世紀にもわたって降々としてきたものが、その盛りを越えて今後落日になるだろうというようなことは、誰にでもすぐわかるものではない。それが見抜けたのは、ピョートル大帝と、オスマン・トルコ治下のギリシア人、わけてもファナール人とであった。

オスマン・トルコはこんご落日になり、ヨーロッパ列強との交渉がしげくなるだろう。トルコ人はこれに対処しうる用意がない。昔日の栄光に慢心して、ヨーロッパから学ぼうとしない。このようなトルコ人を出し抜いて、ファナール人はヨーロッパに近づき、その知識、技術、法、やり方を習得し、外交交渉の衝に必要欠くべからざる人間となり、その功績によって政府の要所を所をおさえてゆき、ついにはヨーロッパ流の多民族国家（ドナウ・ハプスブルグ帝国とかサルディニア王国）のような国家にオスマン・トルコを政治的に変えていこうという遠大な構想を内密に懐くにいたる。これを「ファナール人の大構想⁶⁾」という。オスマン・トルコ帝国を内部から変質させ、これをギリシア正教徒のファナール人が牛耳ろうという夢である。

この夢はオスマン・トルコに破れたビザンツ帝国をふたたび復活させようとする復古主義ではない。しかし、異教徒のイスラムによって征服された恨みが、屈折し、なんとかしてトルコを見返してやりたい復讐心、意趣返し⁷⁾の気持が含まれている。復古主義でないのは、自分の過去（ビザンツ帝国）を理想化し、その理想の再興を後向きにねがっているのではないからである。しかし、復讐の手段は前向きであっても、自力によるのではなく、

「欧化」という他力により、その目標はヨーロッパ流の多民族国家にトルコ帝国を変質させることであった。オスマン・トルコという外来の征服王朝をひっくりかえそうというのではない。トルコ帝国の所要所をファナール人でおさえ、帝国を変質させようというのだから、革命運動とはいえない。外来の力をテコにして体制内で自力をつけ、外来のモデルに合せようとする改良主義といえるだろう。

外来の受容を「下から」行うという点では、ファナール人はわが蘭学者に似ている。同じく在野の動きであつても、徳川政権は征服王朝ではなく、土着の王朝であつた。また、蘭学者は被征服民族ではなく、日本人であつたという違いはある。蘭学者はファナール人のような、徳川政権を変質させようという雄大な政治的な野望をいだいてはいなかつた。だが、「欧化」の先駆者であり、のちに本格化する欧化の前座をつとめ、その準備をした点でも似ている。

ファナール人は一八世紀のあいだに着々とその構想を有能と実績の積み重ねによって実現していく。外務大臣通訳、海軍大臣通訳といった職が新設され、これに当つた。名は通訳でも大臣と同じ職務、権限をもつていた。⁹⁾これらは政府の中核的な要職であつた。また、西洋列強に派遣される大使も、トルコ人は不資格のため、仕方なく代理大使としてファナール人が任命されざるをえなかつた。さらに、ワラキアとモルタヴィアという二つの属州の太守の職が、ルーマニアの貴族(デメトリウス・カンテミール公)の謀反の廉でファナール人の手に落ちた。バルカン一円のトルコ領は、コンスタンティノーブルの総主教の管轄下に入つた。総主教は宗教上だけでなく、政治上の責任をもつもので、ルーマニア、ブルガリアの地域をギリシア人がとりしきることになつた。ファナール人、総主教を中心とするギリシア人が隠然たる勢力をなし、ファナール人の構想は、その目標を達成するかにみえた。だが、これは一九世紀はじめのギリシア・ナショナリズムの高揚によって挫折する。

ファナール人の大構想は、成就の寸前で結局挫折するとはいえ、着々と成功裡に構想が実施されていったのは、何故であろう。基本な二つの点に注目したい。一つは、オスマン・トルコの特異な、すぐれた制度であるミレット制である。もう一つは、オスマン・トルコのこれもまた特異な、しかし醜悪な制度である奴隷宮廷、奴隷軍団（イエニチユリー）の一七世紀からの弛緩、解体から出てくる新状況である。

ミレット制　ミレットとは、オスマン・トルコ内の宗教別の自治共同体のことである。トルコ領内の住民を宗教別に、地域別ではなく組織し、それぞれの宗教別の自治共同体を形成させた。これをミレット制といい、行政分割が地域割りでなく、しかも、信教の自由と共同体の自治とを保証した体制であった。このミレット制は、中東一円の社会地理の実状にもっとも即応したものであり、中東のながい歴史的英知の結晶である。中東一円の「社会地理」とは、異った多くの宗教が同時に共在し、多く異った民族や文明が混在し、共存しているような状況をいう。それを地域別に割っても、内部の等質性に欠け、民族（何々人）も宗教によるのか、職業によるのかででない。とすれば、もっとも明確な差異は宗教にあり、宗教別に区分するのが、社会地理的に現状に即している。一民族で一国家を形成し、その特定地域を一民族の等質性でみだし、異質物は同化するか、はじき出すという「国民国家」の観念で養われたものには、これは、少々理解しにくい状況であり、その状況に即応した体制である。

オスマン・トルコは奴隷宮廷を作ったり、ひどく専制的であったりするので、信教の自由など認めず、国教であるイスラム教を強制したのだろうと思う向きがあるかもしれない。だが、そうではない。オスマン・トルコはもと遊牧民であり、蛮族の征服王朝である。それがビザンツという高度文明を一四、五世紀に征服し、一六世紀には隆盛の絶頂に達し、一七世紀から下り坂になったとはいえ、二〇世紀まで存続しえたのは、ただの専制によ

るのではないであろう。力だけによる支配ならば、ずっと前にひっくり返っているはずである。征服王朝は一般に短命と相場がきまっている。蛮族の征服王朝はとくに短命である。オスマン・トルコの例外的ともいえる長寿は、それ相応の理由がなくてはならない。その理由の一つにミレット制がある。

トルコの本拠地であるアナトリアをふくめ、より広くいって中東一円は、宗教の園のごときもので、ユダヤ系宗教がそう生し、久しく共存していた。そこをトルコが征服した。それぞれミレットを作ることがゆるされた諸宗教は、ギリシア正教をはじめとし、つぎにユダヤ教、アルメニア人の単性論のグレゴリウス派、さらに、ネストリウス派、カトリックなどであり、ゾロアスター教も、「経典」をもつ高度宗教のせいであろうか、同等の扱いをうけるようになった。ユダヤ系宗教の信者は「経典の民」として尊重され、他の多神教徒のように改宗をせまられず、信教の自由、生命と財産とを保証され、自治共同体を組織することをゆるされた。各ミレットにはミレットの長がいて、十分の一税の取り立てをおこない、共同体の運営の責を負った。この長は宗教的責任のみならず、政治的責任をもたされた。

もちろん、非イスラム教徒がイスラム教徒とまったく同じ特権に浴していたのではない。いくつかの点で不利な条件を課せられていた。非イスラム教徒処遇の違いをいうと、つぎの如くである。¹¹⁾

(1) 非イスラム教徒は裁判にあたって法廷で証言できない。イスラム教徒が非イスラム教徒を殺害したとき、死刑には処せられない。非イスラム教徒の男はイスラム教徒の女と結婚できない。だが、イスラム教徒の男は非イスラム教徒の女と結婚できる。

(2) 非イスラム教徒はそれとわかる服装をし、真の信者（イスラム教徒）に間違えられないようにすべきである。馬に乗ってはならず、武器を身につけてはならない。

(3) 教会を増設してはならない。できることといえば、既成のものを修理することである。

被征服民として、異教徒として右のような制限はうけたけれども、「經典の民」としては対等のものと認められ、宗教的「ディアスポラ」たりえた。世俗化しない社会にあつては、とくにユダヤ系宗教の主導的な社会にあつては、すべての差別のなかで宗教的差別が最大のものである。この差別がないことが、ミレット制のもっとも注目すべき特色である。これは異教に対する驚くべき宗教的寛容である。この寛容は開祖マホメットの遺意にもとづくものだが、より基本的には、イスラム教がユダヤ教から派出した、もっともあとの一変種であり、神や予言者を他の二つと共有している同族宗教であるところに、ユダヤ教やキリスト教を完全な異教として敵視し、蔑視しえず、「經典の民」といった高次の基準を設けて、これらを許容することになった。事実、ユダヤ系宗教のなかでは、イスラム教がもっとも宗教的に寛容であるといえよう。早い話しが、中世末、ヨーロッパがユダヤ教徒迫害に熱中しているとき、これらの迫害ユダヤ教徒をうけいれ、迫害から守つたのはオスマン・トルコであつた。トルコにおいてユダヤ教ミレットがギリシア正教ミレットにつぐほど有力であつたという状況を、ヨーロッパにおけるユダヤ教徒の改宗か追放か死を迫られた運命と対比するとき、キリスト教の非寛容とイスラム教の寛容が対照的に実感できよう。

ミレット制はオスマン・トルコの独創ではない。高度宗教の誕生地である中東における英知の最終結晶にすぎない。そのもとは、ペルシア帝国といわれるアカイメネス朝からはじまる。アッシリア、新バビロニアのつた、異民族を骨抜きにして自己に同化しようとする政策とはまるで違ふ、異民族、異宗教を抱擁する政策が、アカイメネス朝からはじまった。アッシリアをつぐ新バビロニアがペルシアに亡ぼされたとき、新バビロニアにとらわれの身であつたユダヤ人が自分たちを解放してくれるものとしてペルシアの勝利をいかに喜んだかは、この間の事

情を雄弁に語るものである。ある社会の宗教的寛容の度合は、その社会におけるユダヤ人の処遇の緩急をみると、良くわかるとさえいいうる。

アカイメネス朝で確立された中東の英知が、そのごササン朝、アラブ・カリフへと受けつがれ、さらに、オスマン・トルコによって継承され、ミレット制へと拡充され、結実したものとみられる。それは一朝一夕に成ったものではない。文明と文明、大帝國と大帝國が久しく衝突し、混在した中東という地域の長い、苦痛にみちた体験がうみ出した英知の産物である。狭隘なナシヨナリズムの「同化主義」の排他性から程遠いもので、ナシヨナリズムに養われてきたものには、中東の英知のすばらしさがすぐにはわからないであろう。だが、ナシヨナリズムが限界にき、これをいかに越えるかが今日の火急の課題となった。人類が一つになろうとするとき、おそらくかつての中東の英知から今後学ぶところが多いのではなからうか。

全盛期のトルコ政府は奴隸として徴収した官僚や軍隊からなり、これが軍隊、警察、司法、財政を一手に掌握した。だが、その他の公務は皇帝の任命するミレットの長にまかされ、宗教的責任のみならず政治的責任をも負わされた。トルコ政府は異民族、異教徒のことに口ばしを入れず、それぞれのミレットの長に多くの公務をゆだねることで繁雑な紛争に手を焼かず、余計な口出しをしなくて済んだ。征服王朝なのに、なぜ、オスマン・トルコが異例に長寿であったかの理由の一端がこの自治制にある。

とすれば、ミレット内で何が考えられていようと、何が行われていようと、反乱や謀反となって表面化しなければ、政府は目くじらを立てることはなかった。立てる筋合もなかった。ファナール人が政府とは別に欧化しえたのも、大それた夢を内々にはぐくみえたのも、ミレット制というこの自治制のおかげであった。ミレット内での自由を存分に満喫し、自己の能力を蓄えて自信をつけ、歴史の動きに鋭感となったものに、政府を乗っ取り、

これを改変してやろうとする野望が芽生えてきたとしても、不可思議なことではない。政府の要所をギリシア正教徒でおさえようというので、革命で新しい体制を作ろうとか、帝国から分離独立しようとかいうわけではない。いわんや、ありし日のビザンツ帝国をふたたび甦らせようとする「復古主義」でもない。オスマン・トルコをヨーロッパ風の多民族国家（ハプスブルグ家のような国家）にしようとする「復古主義」でもない。であれば、本来的には、多民族国家を分裂させ、一民族で一国家を形成しようというナショナリズム運動でもなかった。だが、ヨーロッパをモデルとし、ヨーロッパにインスピレーションを仰ぐファナール人の構想であれば、ヨーロッパでナショナリズムの風潮が優位してくると、一九世紀に入ってからギリシア人の独立運動に参与をせまられ、意ならずもそれに捲きこまれて、「大構想」がナショナリズムにわい小化せざるをえなかった。

- (1) 山本新『トインビー』（一九七八、講談社）二六八～二七〇ページ。
- (2) オスワルト・シュペンゲル『西洋の没落』第一巻（村松正俊訳、一九七七、五月書房）一一三ページ。
- (3) トインビー『世界と西欧』（吉田健一訳、一九五三、社会思想社）第二章。
- (4) エルキンスほか『アメリカ大陸の奴隷制』（山本新ほか訳、一九七八、創文社）五二、一一二、二五六～二五八ページ。
- (5) 宗教的差別と人種差別との関連について前掲の山本新『トインビー』（一九七八、講談社）三二〇～三二七ページ参照。
- (6) A. Pichler: *Der Patriarch Cyrillus Lukaris und seine Zeit*, 1862, S. 123, 124, 162.
- (7) トインビー完訳『歴史の研究』（下島連ほか訳、経済往来社）第16巻二八五ページ。
- (8) トインビー右同第16巻三二八～三三三ページ。第17巻七一～七三ページ。
- (9) トインビー右同第3巻二六ページ。
- (10) 三橋富治男『オスマン・トルコ史論』（一九六六、吉川弘文館）一三八～一四五ページ。
- (11) H. A. R. Gibb and H. Bown: *Islamic Society and the West*, II, 1957, p. 208.